

別紙（事後評価書）

令和4年度文化芸術振興費補助金（劇場・音楽堂等機能強化推進事業）

<p>通し 番号</p>	<p>5</p>	<p>事業区分： 劇場・音楽堂等機能強化総合支援事業 助成対象団体名： 公益財団法人川崎市文化財団 施設名： 川崎シンフォニーホール （ミュージザ川崎シンフォニーホール）</p>
<p>助成対象活動に関する評価</p> <p>（妥当性）</p> <p>川崎市が策定した「川崎市文化芸術振興計画」、「川崎シンフォニーホール条例」及び「かわさきパラムーブメント推進ビジョン」を踏まえた、ミュージザ川崎シンフォニーホールのミッション「『音楽のまち・かわさき』のシンボルとして、音楽ですべての人がつながるまち～共生社会の実現～」と事業の整合性については明確である。事業計画に必要な構成要素が有機的に連関し、当初の予定どおりに事業が推進されたと認められる。</p> <p>また川崎市とフランチャイズ契約を締結している東京交響楽団、地元企業、教育機関と連携を図り、市民参加イベントに重点を置いた事業を展開。実演芸術に触れる機会の創出に努めた。「フェスタサマーミュージザ KAWASAKI」では、聴衆や出演者が周辺の70店舗以上の飲食店から優待サービスを受けられることで、“ホールと街の一体化”や“町の賑わい”が実現。当該施設のシンボル事業の一つである「ミュージザの日」のウェルカムコンサートでは、聴覚障害者向けのボディソニック（体感音響システム）、手話通訳者、字幕表示用タブレットを配置するなど、あらゆる人々が芸術文化を享受できる社会基盤の構築を目指しており、助成に値する文化的、社会的、経済的意義等が認められた。</p> <p>（有効性）</p> <p>令和2年2月から令和3年にかけては新型コロナウイルス感染症の影響で事業の中止や内容の変更などを余儀なくされ、入場者数・参加者数・収益率は目標値と比べ大幅な減少となったが、いち早くネット配信や有観客＋配信を組み合わせた「ハイブリッド開催」を採用。都市型の音楽祭として人気の高い「フェスタサマーミュージザ KAWASAKI」では令和4年度もこの方式を継続し、依然としてホールでの鑑賞に不安がある人々や、遠方に居住する音楽ファンにもオンラインで鑑賞の機会を提供した。</p> <p>公演、人材養成、普及啓発の要素を事業に応じて適切に組み合わせ、効果的な事業展開が行われ、事業全体としておおむね順調に推移してきた。</p> <p>自己点検報告書における達成状況の検証がなされ、各指標についてもおおむね達成しており、一定程度のアウトカムの発現が認められた。</p> <p>（効率性）</p> <p>事業はほぼ計画どおり実施されており、事業期間は適切であったと認められる。</p> <p>また、事業費については、要望時の予算額と報告時の実績額とを比較すると、一部の費目に増減があったものの、ほぼ計画どおり執行されており、適切であったと認められる。</p> <p>（創造性）</p> <p>本ホールの中核事業の一つである「フェスタサマーミュージザ KAWASAKI」は、東京交響楽団をはじめ各地のプロ・オーケストラ、市内にある昭和音楽大学と洗足学園音楽大学の2つの音楽大学オーケストラによる演奏や、かわさきジュニアオーケストラ発表会、サマ</p>		

別紙（事後評価書）

一ナイト・ジャズなどを約3週間にわたり実施し、多彩な音楽を聴衆に提供している。特に令和3年度のフィナーレ公演では、日英の音楽家と川崎市内の特別支援学校のコラボレーションにより創作された『かわさき組曲』が演奏された。「かわさきパラムーブメント」の機運の中ではじまった、川崎市×東京交響楽団×ブリティッシュ・カウンシルによる、「かわさきドレイクミュージック・プロジェクト」を通して結実したものである。近年は地方のオーケストラも出演してその存在感を示しており、「首都圏のオーケストラフェスティバル」から「日本のオーケストラフェスティバル」へ発展しつつある。

東京交響楽団が出演する「モーツァルト・マチネ」は、午前11時開演のコンサートである。休日の午前中1時間程度の時間設定は、ライトユーザーへの訴求力があり、終演後の時間を有効活用することができる等、ユニークである。また、東京芸術劇場との共同事業である「音楽大学フェスティバル・オーケストラ演奏会」においては、首都圏9音楽大学オーケストラの選抜メンバーに、札幌や沖縄などの音楽大学からの共演者を加え、将来の全国展開も視野に入れた合同オーケストラの公演を行っている。いずれも先導性が認められた。

7月1日の「ミュージザの日」ではオープンハウスとし、東京交響楽団によるウェルカムコンサートのほか、指揮者体験、楽器体験、ミュージザの仕事体験などにより、相互交流の場を作り出している。当該劇場・音楽堂等を中心に周辺企業や商業施設を一つにつなげ、川崎駅周辺の賑わいを創出し、1万人以上の来場者を集めており、独創性及び先導性が認められた。

当該劇場・音楽堂等が企画する各事業は、川崎市が推進する「音楽のまち・かわさき」を具現化する重要なツールとなっており、まちのシンボルとしても定着してきている。特に「フェスタサマーミュージザKAWASAKI」は、コロナ禍においても「ハイブリッド開催」を行うなどの工夫をすることで年々参加者が増えており、ホールのメイン企画として定着し高い評価も得ている。

一方、当該劇場・音楽堂等の音響の良さは、海外の演奏団体や演奏家たちにも知られるようになり、ここでの演奏経験があるロンドン交響楽団の音楽監督サイモン・ラトル（当時）も、ミュージザを「世界最高の音響」と絶賛したように、国内外の評価が定着したと認められる。

以上のことから、事業内容が、独創性、新規性、先導性等に優れており、事業の実施によって、当該劇場・音楽堂等の国内外での評価の向上につながったと認められた。

（持続性）

財政面では、川崎市との密接な関係を基礎とした安定的な財政基盤の確保に加え、きめの細かい顧客対応により、リピーターの継続確保による安定した入場料収入や施設利用料収入を確保している。

組織面では、有期雇用職員から無期雇用職員への移行を進めており、無期雇用職員を増員している。また、就業規則の改定などによる長期的・継続的な雇用環境の整備も行い、有能な人材の継続的確保に結びついている。

また、各大学や商工会議所を通じたインターンシップ受け入れや、教員や教員を目指す学生向けのワークショップによって専門的人材を育成するなど、音楽業界全体の活性化やスキルアップにつながる取組を積極的に行っている。

以上のことから、組織活動が持続的に発展し、持続的なアウトカムの発現・定着が認められた。

別紙（事後評価書）

（総 評）

ミュージア川崎シンフォニーホールの実業計画「～音楽で人と人をつなぐ～音楽によるまちづくり推進事業」は妥当性、有効性、効率性、創造性、持続性において適切に進められたと認められる。国際レベルの音楽創造の発信という「高み」とともに、多様な人々が音楽に親しめる機会を提供するという「広がり」もおおむね実現した。

今後もホールが持つ音響によるブランド力、フランチャイズ楽団等との様々なパートナーシップといった自らの強み・特色を生かし、戦略的な事業展開に期待したい。